

どうやらわたしは満員電車のなかにいるらしい。それともこれは町中の雑踏だろうか。渋谷？新宿？ビルの谷間——スクランブル交差点だろうか。この人混みは何事だ？

肩が触れ合いそうなほどの距離に、見知らぬ人ひとりがぎゅうぎゅう詰めになって突っ立っている。いや歩いている？ みんな移動しているのだが、その移動スピードが一定なので、立ち止まっているように感じるだけだろうか。

前後左右、そこにもここにも、顔、顔、顔。ほの白い皮膚の色。大きな頭。パンパンにふくらませた風船のよう。ゆらゆら揺れているところもそっくりだ。わたしの顔もあんなふうになっているのだろうか。手を持ち上げて頬に触ってみたい。でも身体が動かない。手足を動かしているという実感が無い。だけど動いている。ふらり、ふわり。足元が定まらない。頭の上を青空が通過してゆく。刷毛ではいたような雲が流れてゆく。とてもきれいだ。あまりにもきれい過ぎて、本物の青空と本物の白い雲には見えない。まるつきりスクリーンセイバーだ。

ざわざわと音がする。風の音？ いや違う、人の声だ。風船頭の群衆が吠えているのだ。ひとつの言葉。ひとつの質問。

——ヒトチガイダ。

人違いだ。我々はみんなそっくりだから、おまえには見分けがつかはすがない。右も左も同じ顔。前も後ろも同じ顔。

——ヒトチガイヲシタノダ。

そんなはずはない。ちゃんとこの目で見たから、見たままに証言しただけだ。市民としての義務を果たしただけだ。誰に責められる謂れはない。

——オマエハウソヲツイタ。

嘘なんかついていない。どうしてそんな必要がある？ この心のどこに、嘘なんかつかなきやならない理由がある？

そうだ、やっと気がついた。これは夢だ。なんてデタラメな夢だろう。ストレスのせいだ。疲れているのだ。警察沙汰に巻き込まれるなんて、ひどい目に遭ったからだ。こんな嫌な夢、早く覚めてくれるといいのに。早く起きよう。一、二、三！ さあ、目を覚まそう。そして忘れてしまおうのだ。

そのとき、風船頭の群衆がいつせいにこちらを注目した。半ば透き通った影のような身体を動かして、わたしに向かって指を突きつけた。てんでに虚ろな目を見開き、ぼかんと口を開けて叫び始める。オマエハウソツイタ！ オマエハウソツイタ！

「違う！」と、わたしは声を限りに叫んだ。「あたしは嘘なんかついてない！」

叫んで、叫んで、必死で叫んでいるのに、どうしても目が覚めない。これは夢なのに、現実に戻れない。ああ、どうして、どうしてどうして――

2

「うわー！」

叫んで飛び起きた拍子に、派手に音をたててベッドから転がり落ちた。目覚めたというより、眠りのなかから緊急脱出装置で飛び出してきたみたいだった。息が切れている。心臓がとんぼ返りしている。

何だこりゃ？ 頭がガンガンする。喉がカラカラだ。うひょーとかうへえとか言ってみようとするのだが、声が出ない。

自分の部屋であることに間違いない。家具らしい家具といたらこのベッドぐらいしかない殺風景ななかに、脱ぎっぱなしの靴や衣類が適度な彩りを添えている。舷窓からは明るい陽光が差し込んでいる。眩しい。この天気ならば、少なくとも今はまだ朝のうちで、寝過ぎたわけではないようだ。

いきなり、部屋の入口のドアがどかんと開いた。

「シエン、起きてるかい？」

その声を聞き分けるなり、シエンはひとつ飛びでベッドに戻り、くしゃくしゃになった毛布を身体に巻きつけた。

「何だよ！」

戸口の女は、開けた水密ドアに片手をかけて、カッコよく片足に体重を乗せて立っていた。今朝もいつもの出で立ちだ。ぴっちぴちのホルスターと黒革のパンツ。その上から、足首まで届く長さの白いエプロンをかけている。

「おはよ」と、女は最大級の笑みを浮かべた。「何よ、またパジャマ着ないで寝てたの？」

「うるせえな。俺の勝手だろ」

「毛布が汚れるじゃないか。洗濯する方の身になってごらんよ」

朝だというのに、シエンは本格的にカツとなった。「誰もおまえなんか頼んでねえだろ。勝手に押し付けてきたくせに」

「あーら、師匠は喜んでるよ。あたしはやっぱ料理が上手いって」

「エロじじい」

「朝っぱらから口が悪いガキだね。ご飯よ」

と、さえずるように言ってから、女は笑顔を消した。

「どうしたの？ 汗びっしょりじゃない」

言われて、シエンも初めて気がついた。顔も身体もべとべとしている。

「具合でも悪いのかい？」

女がつかつかとベッドに近寄ってきたので、シエンはますます強く毛布に巻き付いた。

「何でもねえよ」

「だけど顔色も真っ白だよ」

ぐいと腕を差し出して、女はシエンの額に触った。シエンとしては可能な限りの回避行動をとったのだが、もともとベッドは窓際にあるので、すぐに追いつめられてしまった。

「熱はなさそうだけど……」

女はくつきりと描いた眉を寄せた。陽射しが正面から彼女の顔を照らし、目元や頬の細かなしわを残酷なほどにくつきりと浮き上がらせる。

「冷汗かいてるね」

女がエプロンの裾でシエンの顔を拭こうとしたので、手で払いのけた。

「何でもないってば」

「おおかた、悪い夢でも見たんだね。あ、凶星だ」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。